

「家族（仮）-後編-」

—二稿—

2025/9/30
脚本 太郎

人物表

衣川 聰子	きぬがわ さとこ	(32)	サトシの実母。故人	中学一年生
荒屋 千代	あらや ちよ	(34)	ヒトミの母。孝志の恋人	長女。小学六年生
衣川 孝志	きぬがわ たかし	(37)	サトシの父	ヒトミの弟。小学一年生
荒屋 ヒトミ	あらや ヒトミ	(7)		
衣川 サトシ	きぬがわ サトシ	(13)		

1. 車内（夕）

後部座席。ヒトミは少し弱弱し気な様子で俯きながらヒトシの頭に手を置いている。鼻血はまだ滴っている。

ヒトシはヒトミにしがみつくようにしながらも、ほとんど泣き止んでいてたまにしゃっくりをしている。また、サトシの携帯ゲーム機を興味深げに見ている。サトシは携帯ゲームをやりつつも、時々気にするようヒトミの方をチラリと見る。その度にヒトシと目が合っている。

サトシ、何度もかにヒトシと視線が合った際、ついに訝しげな様子で、

サトシ「何だよ、お前まで」

ヒトシ、ギクリとする。

ヒトミも訝し気にサトシの方に目をやる。

ヒトシ、逡巡しながら言葉を探す。

ヒトシ「えつと……そのゲーム、いつもやってるよね？」

サトシ「だから？」

ヒトシ「そんなに楽しい？……のかなって」

サトシ「は？」

ヒトシ、困ったように、

ヒトシ「その、ぼく、ゲームやったことないんだ」

サトシ「……そう。珍しいな」

サトシ、困惑しながら、ゲームに視線を戻そうか悩むように、携帯ゲーム機とヒトシの間で視線を行ったり来たりさせる。

ヒトシ、再び興味深そうな視線を携帯ゲーム機に向ける。

ヒトシ「だからさ、その……ちょっとだけ、ぼくにも――」
ヒトシ、思わずといったように、携帯ゲーム機に手を伸ばしかける。

サトシ、それに気付くと過剰に反応し、

サトシ「触んな！」

ヒトシの手を振り払う。

ヒトシは悲鳴を上げ、ヒトミの方に身を引く。ヒト

ミがヒトシを抱きとめる。

ヒトミ、サトシを睨んで非難がましく、

ヒトミ「ちょっと！」

ヒトシはサトシを怖がるような目で見ている。

サトシは大事そうに携帯ゲームを抱えている。ヒト
シの視線を受け、辟易したような顔。

サトシ「何だよ、そんな目で見んなよ」

ヒトミは困惑した顔でサトシを見ている。

サトシ「どうしたっていうのよ。そんなに大事なの？ それ」

サトシ、溜息を吐き、

サトシ「放つとけ」

車のドアを開けて外に出る。

2. 山道（夕）

サトシが車のドアを閉め、**携帯ゲームをしながら林**

の方へ歩いていく。

ヒトミが少し前屈みになつてドアを僅かに開け、声
をかける。

ヒトミ「（ゞゝ）行くの」

サトシ「お花摘みに行くんだよ、察しろ」

ヒトミ「歩きながらゲームしてると転ぶぞ、現代っ子」

サトシ「うるせーな。（小声で）他人のくせに」

サトシ、しばらく**携帯ゲームをプレイしたまま歩き**
続ける。

孝志、木々の影から出でてくる。サトシ、それに気付
かない。

二人、肩をぶつける。

孝志、苛ついた様子で舌打ち。

孝志「（どいつも）（じつも）

サトシ、『まづい』といったように顔をひきつらせ、
手で顔をかばおうとする。

しかし間に合わず、孝志に思い切り顔を殴られる。
サトシ、地面に倒れる。携帯ゲーム機が転がる。

痛みに顔を顰めるも、すぐに何かを諦めたような無気力な表情になる。

孝志、苛立たしげにサトシを見下ろす。

孝志 「やっぱそんなツラか」
サトシ「は？」

孝志 「いや、お前の顔久しぶりにちゃんと見たけどさ……やっぱ俺ら親子だなと思つて。俺も今のお前くらいの時から、そんな風だったよ」

サトシ、不服そうな顔。

直後、ハツとして視線を彷徨わせ、携帯ゲーム機を探す。

それは孝志の足元にある。

孝志、バカにしたように鼻で笑う。

孝志 「安心しろよ、お前にはあの女みたいに『車直せ』なんて無茶言わねえから。俺にできなことがお前にできるわけねえもんな」

孝志、落ちている携帯ゲーム機を踏みつける。

サトシ、血相を変えて、

サトシ 「やめろ！」

携帯ゲーム機の壊れる音。

孝志 「こんなモンばっか見てて、前見て歩く」ともできないんだから」

サトシ、慌てて携帯ゲーム機を拾い上げる。

携帯ゲーム機は画面が割れています。電源ボタンを押すが、点灯しない。

サトシ、歯を食いしばり、憎悪の籠つた目で孝志を睨みつける。

孝志、馬鹿にしたように、

孝志 「大体それいつのだよ。どつかで拾ってきたのか？ つたく、そんなに必死になつて、貧乏性などこも俺似だよな」

孝志、湖の方に去つていく。

サトシ、携帯ゲーム機に素早く視線を戻し、再び電源ボタンを押すも、画面は点灯しない。

ムキになつて何度も執拗に長押しするが同じである。

やがて諦めたように手を止め、携帯ゲーム機を閉じる。

露わになつた携帯ゲーム機の天板にはシール状の写真が一枚貼つてある。写真には今のヒトシと同い年くらいの頃のサトシと、衣川聰子（32）が写っている。二人とも笑顔だが、聰子の顔にはガーゼなどが貼られ、暴行を受けた様子。サトシは無傷で、バースデーケーキを持っている。

サトシ、写真を見て泣きそうな顔になる。

しかし、どうにか泣くのを堪える。

しばらくしてふと、車の方に視線を移す。

車内には誰もいない。

視線を泳がせる。

ヒトミとヒトシ、二人で千代からは距離のある位置に座つて湖に浮かぶ鳥を見ている。サトシの様子には気付いていない。

孝志、未だうずくまつて泣く千代の傍らで屈み、何か言う。

千代が小さく首を振る。

孝志、苛立つた様子で千代に軽く蹴りを入れる。

千代から離れる。

湖に向けて石を投げ、水切りを始める。

サトシ、殴られた方の頬に手を当てる。

サトシ「痛」

顔を覆め、手を離す。

ヒトミが何やら話しながら、ヒトシの頭を撫でている。ヒトシは嬉しそうに微笑んでいる。

地面にはポタポタとヒトミの鼻血が滴つていて。ヒトミは鼻血を拭う様子もなくヒトシに微笑んでいる。サトシ、しばらくヒトミとヒトシを真剣な顔で見つめる。

やがて携帯ゲーム機の天板に貼られた写真に視線を戻し、大事そうに抱える。呼吸を整えるようにしながら写真を見続ける。

サトシ、またしばらくすると、大きく溜息をつき、
壊れた携帯ゲーム機をズボンのポケットにしまい、
独りゆつくりと立ち上がる。

そして、フラフラと車の方に歩いていく。

3. 車内(夕)

サトシが運転席のドアを開けて乗り込む。

しばらく眉を顰め、どうしたら良いか分から様子。

やがて小首を傾げ、刺さりっ放しのキーを捻つてみる。

エンジンがかかる。

サトシ「は?
マジかよ」

サトシ、拍子抜けした様子でシートに身を預ける。

サトシ「何だよ……かかんじゃん」

その時、誰かの悲鳴が聞こえ、眉を顰め、
直後、窓から外を見て絶句。

4. 山道(夕)

サトシから見て、左に孝志と千代、右にヒトミとヒトシと割るように、熊が立っている。熊は威嚇の姿勢で左右どちらを襲おうか決めあぐねている様子。

5. 車内(夕)

サトシ、愕然とした表情。

やがて、悩ましげに手で顔を覆う。

6. 山道(夕)

孝志と千代は必死にヒトミたちの方に指を指し、

孝志「あっち行け、あっち行けっての」

やがて熊がヒトミたちの方に歩き出す。

ヒトシが悲鳴を上げ、ヒトミが彼に覆い被さる。二人とも震えている。

直後、車の走行音。

走ってきた車に熊が撥ね飛ばされ、倒れる。

車の運転席にはサトシ。

サトシ、ヒトミとヒトシが居る側の窓を開け、

サトシ「早く乗れ」

しかし、四人とも腰が抜けたように呆然としている。

サトシ、溜息。

車から出て、後部座席のドアを開ける。

ヒトミが抱いたヒトシと、彼女の身体を後ろから抱えて引きずつていく。

熊が起き上がる様子はない。

孝志、ハツとして、慌てて立ち上がりうとする。

孝志「待てコラ、俺の車——」

千代「こ、腰が抜けちゃったの……運んでって」

孝志「知らねえよ、放せ馬鹿」

孝志、千代の額を押して引き放そうとする。

二人、揉み合う。

千代「何よ、婚約相手を熊の真横に置いてくつもり？ 血も涙

もないのね」

孝志「はあ？ さっきは『別れる』とかほざいてたくせに何だ

その言い草は」

二人が揉み合っている間、サトシは着々とヒトミと

ヒトシを車に乗せていく。

孝志「マジでいい加減にしろよ……こんなことしてる場合じゃ

……」

一度、車のドアが閉まる音。

孝志と千代、ハツとする。

車が発車する。

7. 車内（夕）

走行中の車の中。

運転席にサトシ、後部座席にヒトミとヒトシ。

リアウインドウから、孝志と千代が何か叫びながら走つて追つてきているのが伺える。

やがて二人、もつれ合うように転び、声も途絶える。

ヒトミとヒトシ、危機が去つたことがまだ信じられない、といった様子。

ヒトミ「アンタ、車運転できただんだ」

サトシ「そんな難しくないよ。レースゲームで大体覚えた」

ヒトミ「え不安しかないんだけど」

サトシ「何でだよ」

ヒトミ「だつてアンタあのゲーム下手だつたし」

サトシ、意外そうな顔。

鼻を鳴らして、

僅かに沈黙。

ヒトミ、後ろを振り返る。

孝志と千代の姿はもう見えない。

ヒトミ「これ、あの人たち置いてつて死んじゃつたらさ、何かの罪になるのかな?」

サトシ「知らねえ」

ヒトミ、卑屈に笑つて、

ヒトミ「どうせ罪になるなら、戻つてあいつらもさ、轡き殺しちゃおうか」

ヒトシ、恐怖する顔。

サトシは慚然とした表情。

サトシ「下らねえ」と考えるなよ」

ヒトミ、ハツとして、

ヒトミ「…………そうだね、ごめん。…………てか、それよりありがとう、助けてくれて。…………正直意外だつたけど」

サトシ「別に。たまには他の暇潰しも悪くないなつて」

ヒトミ「ゲームには飽きた?」

サトシ「そんなど」

僅かに沈黙。

やがてサトシ、バックミラーを見ながら少し言いにくそうに、

サトシ 「それよりさ」

サトシ、運転席と助手席の間の収納スペースに置いてあるボックステイツシュを後ろに投げる。

ヒトミ、困惑顔。

サトシ 「鼻血くらい拭きなよ」

ヒトミ、自分の顔を触り、今鼻血に気付いたというような顔。

ヒトミ 「うわ、痛……いつた……え、あれ？ いつから？」

サトシ 「……さつきからずっと」

ヒトミ、ゆっくりと鼻血を拭き始める。

そして静かに泣き出す。

ヒトミ 「そっかあ……いつたいなあ……うん、凄い痛いよ」「

ヒトミ、心配そうにヒトミの手を握る。

ヒトミ、泣きじやくっている。

サトシ、バックミラーから田を逸らすようにして、氣まずそうに、

サトシ 「……悪かったよ」

ヒトミ 「何でアンタが謝るの……てかティツシュありがとお」

サトシ 「いや別にそんなの……」

ヒトミ 「大体アンタだつて色々大変で……（その先は嗚咽で聞こえなくなる）」

サトシ、黙っている。

ヒトミ、やがて泣き終わると、何度も鼻をかむ。小さく深呼吸。

それからちょっと神妙な顔になり、

ヒトミ 「それはそうと兄貴さ」

サトシ、驚いた様子で、

サトシ 「誰が兄貴だよ」

ヒトミ 「わたしたち、道に迷つてることには変わりないと思うんだけど」

サトシ 「……そういうやうだな」

ヒトミ、「の車……ど、に向かってるのかな」

その間も車はまっすぐ進んでいく。

サトシ、少しだけ考えてから、
サトシ「やあ。でもまあどうだろうと、あそこの留まつてゐるよ
りはずっとマシだろ」

終